



Title	ドイツ圏暮史研究(1)
Author(s)	杉浦, 康則
Citation	独語独文学研究年報 = Nenpo. Jahresbericht des Germanistischen Seminars der Hokkaido Universität, 44: 127-142
Issue Date	2018-03
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/70508">http://hdl.handle.net/2115/70508</a>
Type	bulletin (article)
File Information	44_07_sugiura.pdf



[Instructions for use](#)

## ドイツ囲碁史研究(1)

杉浦康則

はじめに

私が長期的に取り組む本研究の方向性、及び本稿の目的を最初に示したい。

2016年は囲碁に関わる人々の多くが衝撃を受けた年であった。2016年3月、囲碁の世界チャンピオンであるイ・セドル（李世乭 1983-）がグーグル・ディープマインド（Google DeepMind）によって開発されたコンピューター囲碁プログラムのアルファ碁（AlphaGo）との5番勝負に敗れ、チェスや将棋に続き囲碁もコンピューターが人に勝る時代を迎えたのである。このことは当時大きな話題となり、日本棋院発行の『碁ワールド』にも大きな記事が掲載された<sup>1</sup>。また、次のように一般の新聞においてもアルファ碁の勝利は大きく取り上げられ、囲碁に馴染みのない人々にもこの情報は届けられた。

米IT企業グーグル傘下の英グーグル・ディープマインド社が開発した囲碁の人工知能（AI）「アルファ碁」と、世界で最も強い棋士の一人、韓国の李世乭九段（33）の最終第5局が15日、ソウルで行われ、アルファ碁が中押し勝ちした。通算成績はアルファ碁の4勝1敗。[...] AIの戦いぶりに注目した日本のトップ棋士たちは、長い歴史と自らの経験で培った大局観や形勢判断を超えるAIの能力に、驚嘆した。「ディープラーニング（深層学習）」という手法を用い、自らが学習して強くなるアルファ碁。人間の棋譜を学習材料にしながらも、実際に打たれた手は人間の感覚と違った。<sup>2</sup>

このように一般紙においてアルファ碁が注目されたことは、囲碁自体に対する関心以上に人口知能の発展への関心によるものと思われる。したがって、囲碁が盛んな東アジア以外の地域においてもアルファ碁の勝利が注目されることは不思議なことではなく、ドイツに

---

<sup>1</sup> 『碁ワールド』の2016年5月号には、巻頭のグラビア記事において次のように述べられている。「グーグル傘下のディープマインド社が開発した『アルファ碁』。昨年10月に中国出身でヨーロッパチャンピオンのプロ棋士・樊麾（ファンファイ）二段に5戦5勝して、史上初めてプロ棋士に勝利したことが1月28日に発表され、囲碁界に衝撃が走った。そのアルファ碁が韓国の李世乭九段と5局争う『グーグルディープマインドチャレンジマッチ』が3月9日から15日にかけて行われ、アルファ碁が4勝1敗で勝利を収めた。[...] この人工知能が人間に勝利したというニュースは囲碁界のみならず、世界中で連日報道された。それというのも今回アルファ碁で搭載された人工知能（AI）はディープラーニング（深層学習）の手法を用いたからだ。このディープラーニングはニューラルネットワークと呼ばれる人間の神経回路を模してつくられていて、大量のデータからAI自身が『特徴』を見つけ出す。それは人間の『直感』に近い状況分析だという。」Vgl. 『碁ワールド』第63巻第5号、2016年5月1日、2～3項。この記事に続き、10項から19項までは対局に関するプロ棋士たちの座談会、20項から24項までは全5局の棋譜と解説が掲載されている。

<sup>2</sup> 『朝日新聞』2016年3月16日、3頁。

おいても様々な記事が書かれた<sup>3</sup>。しかし、人工知能の観点からではなく、私のように囲碁の愛好家という立場からこの対局に注目した人々がドイツにも存在する。「ドイツ碁連盟」(Deutscher Go-Bund)<sup>4</sup>のホームページ<sup>5</sup>にはドイツ人囲碁愛好家たちが自由に書き込みをするフォーラムがあり、李対アルファ碁には対局の進行に伴い観戦者たちの多くの声が投げかけられた。それどころか、この対局はその開始以前からフォーラムでの話題となっていたのである<sup>6</sup>。

このようなアルファ碁の活躍に熱中したドイツ人囲碁愛好家たちの存在は、日本ではあまり知られていないと思われる。また、上述のドイツ碁連盟という組織の名称は日本の囲碁愛好家たちにとってさえも馴染みのないものだろう。それどころかドイツの囲碁について問われても、具体的にどのような活動が行われているのか、あるいはドイツで囲碁はどれほどの知名度があるのか想像することすら困難だろう。しかし1880年代初め、オスカー・コルシュルト(Oskar Korschelt 1853-1940)によって本格的に日本からドイツに囲碁が伝えられてから、ドイツにおける囲碁の活動は次第に発展し、21世紀初頭には大きな転換点を迎えていた。ドイツ碁連盟の機関紙『ドイツ碁新聞』(Deutsche Go-Zeitung)の2004年第1号においては、2000年から2004年の各年初頭の連盟構成員数がグラフで示されており、2000年から2003年までは1600前後であるが、2004年初めには1800近くにまで増加している<sup>7</sup>。この変化について、当時の連盟の会長(Präsident)マルティン・シュティアスニー(Martin Stiassny)は次のように述べている。

---

<sup>3</sup> 例えば『ツァイト・オンライン』(Zeit Online)においても連日この対局は注目され、2016年3月9日には「グーグルのソフトウェアが囲碁世界チャンピオンに勝利」(Google-Software gewinnt gegen Go-Weltmeister)という次のような記事が掲載された。「世界チャンピオン李世石とコンピューターアルファ碁のボードゲーム対決第1ラウンドを、人工知能が制した。[...] 囲碁は伝統的なアジアのボードゲームである。それはチェスよりも複雑であるとされており、それゆえそもそも人工知能には理解困難とされていた。人工知能の専門家たちは、コンピューターがプロの囲碁プレーヤーたちを打ち負かすことができるまで、さらに10年かかるだろうと最近まで予言していた。」Vgl. <http://www.zeit.de/sport/2016-03/alphago-sieg-go-brettspiel-weltmeister-lee-sedol-kuenstliche-intelligenz>

<sup>4</sup> ドイツにおいて囲碁は通例「Go」と呼ばれている。本稿ではドイツ語の固有名詞の日本語訳には「碁」、それ以外には「囲碁」という表記を用いる。

<sup>5</sup> <http://www.dgob.de/>

<sup>6</sup> 2015年10月、プロ二段の樊麾(1981-)対アルファ碁の5番勝負が行われ、アルファ碁の5勝という結果であった。これは19路盤での互先という条件の下での、コンピューター囲碁プログラムのプロ棋士に対する初勝利であった。ドイツ碁連盟のフォーラムでは、この樊対アルファ碁についての「グーグルが樊麾を5:0で打ち負かす?」(Google schlägt Fan Hui 5:0?)というスレッドも作られ、愛好家たちによって討論が行われた。Vgl. <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=5939.0> (180) 討論が長くなるとスレッドのページが変わり、アドレスの末数5939.0は5939.20、5939.40というように20ずつ増えていく。ここで取り上げた樊対アルファ碁のスレッドはこの末数が5939.180まで続く、全10頁のスレッドである。本稿では引用するスレッドが複数ページにわたる際、最終ページのアドレス末数のピリオド以下の数をカッコ内に記す。

<sup>7</sup> Martin Stiassny: Mitgliederentwicklung. In: Deutsche Go-Zeitung (1/2004), S.8.

2003年の初頭まで、本質的な動きがなかったことをこのグラフは示している。私が思うに、量的のみならず質的な変化は2003年に起きた：

- ・10.8%の構成員数の増加
- ・3.5%から6.8%への、青少年構成員たちの割合の飛躍
- ・2003年における、少なくとも70人の新たな青少年構成員たち

[...]とりわけ喜ばしいのは、昨年初めて全ての連盟州支部で構成員数が増加したということ、私の手元にある非常に詳細な過去4年の数値から読み取れることである。この傾向を2004年にうまく維持することができれば、2005年1月1日、私たちは構成員2000人の記録に到達するだろう。そのためには11.9%の「成長率」が必要であり、それは2003年の10.8%という点から可能であるように思われる。<sup>8</sup>

そして2004年、ドイツ碁連盟の構成員数増加に加え、ドイツ囲碁界の発展はより明確な形として現れる。インターネット対局による「碁ブンデスリーガ」(Go-Bundesliga)の発足である。2005年の『ドイツ碁新聞』第4号において、シュティアスニーはブンデスリーガの初シーズンを振り返り、その発足の経緯及びリーグでの対局の経過を次のように簡潔に描写している。

2004/5年シーズンの碁ブンデスリーガを引き起こすきっかけとなったのは、2003/4年のベルリン対ハンブルク都市対抗戦であった。その際には対局を見守るために[...]突然、予想に反して100人以上の観客たちがKGSに姿を現した。リーグでのチーム対抗戦という大昔からの願いを、インターネット上での囲碁対局というこの新たな手段によって実現することはできないかという詳細な議論が、討論フォーラムにおいて生じた。[...] トリーアのハンス＝ユルゲン・コッホが対局規則を起草し、碁ブンデスリーガが生み出された。[...] 200人をはるかに超えるプレーヤーたちがタイトル、昇格及び降格の座を巡って、4つのリーグで7あるいは9ラウンドの対局をした。<sup>9</sup>

---

<sup>8</sup> Stiassny, S.8f. 構成員数の増加は2004年にも続き、『ドイツ碁新聞』の2004年第6号において、この機関紙の編集者トビアス・ベルベン (Tobias Berben) は次のように述べている。「現在、ドイツ碁連盟における最も喜ばしい発展の1つは、おそらく構成員数の発展である。マルティン・シュティアスニーはドイツ碁新聞の2004年第1号において構成員数が約1800であること、そして2003年の成長を10.8%と記録できることを誇らしく告げることができたのであるが、それは今年さらに上昇した。11.3%の成長の下、構成員2000人が間近である。さらにこのままいけば、私たちは本気で5000人の記録を次の目標として視野に入れるべきだろう！」 Vgl. Tobias Berben: Mitgliederentwicklung 2004. In: Deutsche Go-Zeitung (6/2004), S.9.

<sup>9</sup> Martin Stiassny: Go-Bundesliga. In: Deutsche Go-Zeitung (4/2005), S.3. KGSとは、<http://www.gokgs.com/>からアクセスし無料で対局を行うことができる囲碁サーバーで、開発者はウィリアム・シューベルト (William Shubert) である。このサーバーは「囲碁ウェブ」(Igoweb) という名で2000年4月に開設されるが、1か月後には囲碁関連商品販売会社棋聖堂との合意の下「棋聖堂碁サーバー」(Kiseido Go Server) に、さらに2006年には「KGS碁サーバー」(KGS Go Server) と改名された。2017年、このサーバーはアメリカ碁財団 (American Go Foundation)

シュティアスニーによるこの記事から、ブンデスリーグ発足の契機はインターネット対局のためのサーバーである KGS 上でのベルリン対ハンブルク都市対抗戦だったことがわかる。しかし、ブンデスリーグ発足の直接的なきっかけが都市対抗戦だったとしても、より広い目で見ると、この都市対抗戦をもたらしたドイツ囲碁界における好況がブンデスリーグ発足の要因だったともいえる。先述の通り、当時ドイツの囲碁界は大幅に連盟構成員数が増加するほど活気に満ちていた。もちろんドイツ碁連盟の構成員たちもこの活気を感じ取っており、2004 年半ばにシュティアスニーに代わり連盟の会長に就いたベルンハルト・クラフト (Bernhard Kraft) は、ブンデスリーグの初シーズン開幕直前の 2004 年 10 月 1 日、フォーラムにおいて次のように述べている。

ドイツの囲碁プレーヤーたちの中に台頭の機運のようなものがあると私は気付いた。何かを組織する準備のある人々が多くいる。ベルリンのハンス・ピーチュ・メモリアルにおいて先週末、このことを最もよく確認することができた。[...] 大人の囲碁プレーヤーたちのためにもすばらしい催しを行うチャンスを、どうして私たちが活用しないだろうか。<sup>10</sup>

ここでクラフトが述べている「台頭の機運のようなもの」はアンドレアス・フェッケ (Andreas Fecke) によっても感知されており、2004 年 7 月 3 日、彼はフォーラムにおいて「長年経た後に、久しぶりにドイツの囲碁展望が再びポジティブな方向に変化している時代に、可能な進展や、必要な進展、あるいは避けるべき展開について討論することはもちろん意義深い」<sup>11</sup>という発言をしている。

それでは、何がドイツの囲碁にこのような変化をもたらしたのか。その変化からどのような活動が生み出されたのか。そしてそれらの活動は、その後どのような展開を迎えるのか。これらの点を究明するためにはドイツにおける囲碁現代史に目を向けなくてはならない。しかしドイツの囲碁現代史、あるいはそもそも全般的なドイツ囲碁史の文献などほとんど

---

に売却された。Vgl. <http://senseis.xmp.net/?KGS>

<sup>10</sup> <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=912.0> (420), Go-Bundesliga – eure Fragen werden hier beantwortet..., kraft, 1.10.2004 12:06. フォーラム上での討論においては、意見を投稿した者の名前あるいはペンネームと投稿日時も掲載されている。本稿において個々の投稿者の意見を引用する際には、スレッドのアドレス、スレッドのタイトル、投稿者の名前あるいはペンネーム、投稿日時の順に記載する。また、クラフトの投稿において言及されているハンス・ピーチュ (Hans Pietsch 1968-2003) とは、1997 年に日本棋院でドイツ人初のプロ棋士となった人物で、彼は 2003 年のグアテマラでの囲碁宣伝巡業中に武装強盗の襲撃の犠牲となった。ハンス・ピーチュ・メモリアル (Hans Pietsch Memorial) とは、2003 年からピーチュの誕生日である 9 月 27 日頃に毎年行われている学校対抗の囲碁選手権で、各学校から 3 人の代表が出場する団体戦トーナメントである。

<sup>11</sup> <http://www.dgob.de/yabbse/index.php?topic=516.0> (60), Deutsche Insei-Liga, ferdi, 3.7.2004 14:59.

存在せず、唯一、フランコ・プラテージ (Franco Pratesi) の著作が挙げられるのみである<sup>12</sup>。ただし、西洋の囲碁の歴史を詳細に扱ったこの著作も叙述の対象とされる時期が 1988 年までであるため、本研究が対象とする 21 世紀初頭のドイツの囲碁に関する情報をそこに求めることはできない。そこで本研究ではドイツ碁連盟の機関紙である『ドイツ碁新聞』及び連盟ホームページ内のフォーラムでの討論等を主な資料とし、ドイツ現代囲碁史を組み立てていくことになる。とりわけフォーラムにおいては、主に連盟の構成員たちによって多くの様々なテーマが討論されており、そこからドイツ囲碁界の動向をつかむことができる。

本研究が最終的に目指すところは上述の通りであるが、本稿ではまず本題に立ち入る前段階として、ドイツにおける囲碁の歴史をその黎明期から概観することに徹したい。日本でドイツの囲碁史があまりにも知られておらず、現在に至るまでの歴史をある程度は示しておくことが必要だろうというのもその理由の 1 つであるが、同時に、「長年経た後に、久しぶりにドイツの囲碁展望が再びポジティブな方向に変化している時代」というフェッケの発言を念頭に置きながら歴史概観することも私の意図するところである。この当時に至るまでドイツの囲碁が発展するための機会は、どれほど長期に渡り訪れなかったのか。また、「再び」ポジティブな方向に変化しているということは、かつてドイツで囲碁発展の展望が開けていたのだろうか。ドイツへの囲碁到来からの歴史を振り返る中で、次第にこの点は明らかになるはずである。

では、現在に至るまでのドイツの囲碁史に一步を踏み出そう。

## 1. ドイツへの囲碁の到来

プラテージは囲碁の存在がヨーロッパに知られた時期までさかのぼって歴史描写を開始しているが、本稿ではドイツで本格的に囲碁を学ぶことを可能にしたオスカー・コルシェルトを出発点としたい。

1876 年 12 月、コルシェルトはお雇い外国人教師として来日し、東京大学医学部教授として化学と数学を担当した。医学部時代のコルシェルトの業績としては日本酒醸造の研究、開拓使麦酒醸造所のビールに関する品質鑑定や技術指導、そして大麦を原料とする大麦製日本酒醸造の提言が挙げられるが、後に農商務省地質調査所に移動してからは日本海塩製造の研究や日本陶業の研究も行っている<sup>13</sup>。

コルシェルトの来日の理由には諸説あるが、本稿ではそのうちの 1 つを紹介する。1853 年生まれのコルシェルトは、1871 から 75 年までザクセン王立高等工業学校 (現ドレスデ

---

<sup>12</sup> Franco Pratesi: Eurogo1. Go in Europe. Part 1: Until 1920. Florence (Multimage) 2003; Franco Pratesi: Eurogo2. Go in Europe. Part 2: 1920-1950. Florence (Multimage) 2003; Franco Pratesi: Eurogo. Vol. 2. Part 3. Go in Europe 1949-1958. Part 4. Go in Europe 1959-1968. Roma (Aracne) 2004; Franco Pratesi: Eurogo. Vol. 3. Part 5. Go in Europe 1968-1978. Part 6. Go in Europe 1979-1988. Roma (Aracne) 2006.

<sup>13</sup> 藤原隆男: オスカー・コルシェルトの大麦製日本酒の醸造について [『岩手大学文化論叢』第 5 輯, 2002, 63~76 頁] 63~64 頁。



ン工科大学)で化学を学ぶ。その後フリードリッヒ・ヴィルヘルム・ベルリン大学(現フンボルト大学)及び鉱山学校(現ベルリン工科大学)にも学ぶが1年足らずで辞め、ドレスデンのブラウエン及びライプツィヒ近郊のロイドニッツのビール醸造所で品質分析に関する仕事をしていた。このコルシェルトを日本に呼び寄せたのは、1875年に来日していたエドムント・ナウマン(Edmund Naumann 1854-1927)であった。コルシェルトは1877年11月から、開拓使の要請でサッポロ・ラガー・ビールの品質試験、鑑定及び技術指導に当たることになるが、このビール醸造を念頭に置いた人選の結果、コルシェルトが日本に招かれたようである<sup>14</sup>。

このような経緯から、酒に関する研究をするお雇い外国人教師として来日したコルシェルトであったが、日本滞在中にひどく体調を崩し、寝たきりで過ごさなくてはならない時期があった。しかし、まさにこの体調不良の時期がドイツへの囲碁到来の布石となる。病床に伏す間に囲碁についての叙述を読んだコルシェルトは、囲碁を教授してくれる人物を探し、第18世本因坊村瀬秀甫(1838-1886)の教えを受けるに至る。この当時のことをコルシェルトは1880年9月から1881年7月にかけて連載した「碁」(Das „Go“-Spiel)という記事において次のように述べている。

長期にわたる病気のせいで、私は興味をそそらない初期段階を超えるために必要な時間を得た。そして今なお日本一のマイスターの教えを受けており、囲碁がチェスに匹敵する非常に高貴なゲームであることを十分に理解するに至った。<sup>15</sup>

この叙述からまずわかるのは、コルシェルトが囲碁入門時に困難を感じたということである。彼はその理由として、体系的な囲碁入門書が存在しなかったことを挙げ、次のように述べている。

囲碁の高い価値にもかかわらず、ここに暮らす外国人でそれに比較的詳細に取り組んだ者がまだいないということは[...]おそらくある程度良いプレーヤーとなるためにだけでも必要とされる大きな苦勞と多大な時間の浪費のせいだろう。私たちがいつもチェスの本で見出すようなゲームの体系的な取り扱い、囲碁の本には見出されない。それは、この手あるいはあの手は良いあるいは悪いということを断言する、わずかで非常に短いコメント付きの単なる実例集である。<sup>16</sup>

このように囲碁入門時に困難を感じたコルシェルトであるが、「囲碁がチェスに匹敵する

---

<sup>14</sup> 藤原隆男：オスカー・コルシェルトと開拓使 ―開拓使麦酒醸造所を中心として― 『岩手大学文化論叢』第3輯，1995，95～110頁] 95～99頁。

<sup>15</sup> Oskar Korschelt, Das „Go“-Spiel. In: Mittheilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur und Völkerkunde Ostasiens, Heft 21 (1880), S.12-20, hier S.12.

<sup>16</sup> Ebd.

非常に高貴なゲームであることを十分に理解するに至った」という叙述からもわかる通り、村瀬を師とした彼の棋力は短期間でかなりのレベルまで達したようである。彼は村瀬に指導してもらう際の置石の数について次のように述べている。

現在、日本最強のプレーヤーで第7のランク、つまり七段である私の師村瀬秀甫氏は、私に7子置かせてたいてい私を打ち負かす。彼は授業を始めた頃 […] 私に13子置かせ、それでも常に私を負かしていた。<sup>17</sup>

たいてい打ち負かされていたとはいえプロ七段に7子で打たせてもらっていたということから、現在の基準で考えるならコルシェルトはアマ高段者の域に達していたと想定される。1876年の来日後、この記事が書かれる1880年まで、コルシェルトが囲碁に取り組むことができた期間は最も長く見積もっても4年弱程しかないことを考慮すると、その上達の速度に驚かされる<sup>18</sup>。

コルシェルトが連載した「碁」は1881年に1冊の本となる。囲碁の規則の詳細な説明を含む彼の記事と本により、ドイツにおいても囲碁を学ぶことが可能となった。しかし、そこには問題が残されていた。入門書としては高等すぎたのである。日本及び中国の囲碁の歴史、そして囲碁の規則の説明等は確かに入門者向けのものであるが、プロの対局を基にした解説や村瀬秀甫の定石等は初心者には理解困難であろう。まさにコルシェルト自身のレベルの高さが招いた問題であった。

このような問題を伴いながらも、コルシェルトがドイツにもたらした囲碁を即座に受け入れる人々は存在した。それは彼が帰国後に暮らしたライプツィヒにおいてである。この当時ライプツィヒでは、週刊紙に囲碁の記事を載せたフォン・デア・ガベレンツ (Hans Georg Conon von der Gabelentz 1840-1893) 教授、自らのゲーム百科事典に囲碁を取り入れたフリードリッヒ・アントン (Friedrich Anton)、そして現地の囲碁プレーヤーたちに指導碁を行ったミウラ<sup>19</sup>を始めとする日本人学生たちというように、囲碁グループ発展のための要因が揃うこととなった。とりわけチェスの分野で活躍し、『ドイツチェス新聞』編集委員会のメンバーであったライプツィヒの数学教員リヒャルト・シューリヒ (Richard Schurig 1820-1896) は、コルシェルトによる叙述が初心者には難しすぎると考え、1882年に『《碁》、日本人の国民的ゲーム』 („Go“, das Nationalspiel der Japanesen) を出版する。この著作は同年に第2版が出され、その後も再版が繰り返された。また、この著作は同じくライプツィヒのオスカー・ルール (Oskar Ruhl) のルール出版が制作した独自の囲碁セットと共に販売された。囲碁セットとシューリヒの本を併せて販売することは少なくとも1888年に再び

---

<sup>17</sup> Ebd., S.17.

<sup>18</sup> ちなみに、本稿提出時 (2017年9月末) において囲碁に取り組んできた期間が5年程になる私は、一級程度の棋力しか持ち合わせていない。

<sup>19</sup> この人物に関する詳細は不明である。



行われ、その際の囲碁セットとしては厚紙製の碁石と碁盤のセット（2 マルク）、木製の碁石と布製の碁盤のセット（3 マルク）、そして木製の碁石と碁盤のセット（12 マルク）があった<sup>20</sup>。

シューリヒの著作と囲碁セットは既に 1882 年、ウィーンの書店でも取り扱われていた。当時、オーストリアの複数の新聞においてシューリヒの著作と囲碁セットについての記事が掲載された<sup>21</sup>。このことから、ライプツィヒからオーストリアへと囲碁が広まったことは明らかである。しかし、ライプツィヒの囲碁グループに関する情報はその後途絶え、ドイツ囲碁史に短期間の不明瞭な時期が訪れる<sup>22</sup>。ドイツ囲碁史のさらなる展開は、新たな都市で囲碁グループが形成される 20 世紀初頭から再び明確なものとなる。

## 2. レオポルト・プファウントラーの『ドイツ碁新聞』とベルリンの囲碁グループ

レオポルト・プファウントラー（Leopold Pfaundler 1839-1920）はインスブルック及びグラーツで物理学教授を務めた人物である。プファウントラーも囲碁に関する著作を残しているが<sup>23</sup>、ドイツ囲碁史において彼が果たした役割の中でより重要なのは、グラーツでの『ドイツ碁新聞』の発行だった。プファウントラーはヨーロッパに点在する囲碁プレーヤーたちの住所を収集し、彼らを結び付けるべく 1909 年 2 月 15 日、『ドイツ碁新聞』の発行を開始する。その第 1 号の初めのページには次のように彼の目的が述べられている。

全てのボードゲームの中で最も古いこのゲームを知る者及び賛美する者の数は、ドイツ地域においてきっとわずかではない。しかし彼らにはつながりや精神的交流はない。なぜなら彼らはこの交流を仲介するであろう機関紙を手にしていないからである。[…]  
このお知らせの著者はその隙間をふさぐことを試みる。[…] 興味深い対局、問題、このゲームの理論的研究、囲碁プレーヤーたちの住所、個人的報告、道具の購入源を互いに知らせ合うことを囲碁愛好家たちに可能にする、このような新聞が用いられるべき

<sup>20</sup> Pratesi, Eurogo1. S.57ff.

<sup>21</sup> 例えば 1882 年 6 月 17 日の『プレッセ』(Die Presse)には次のように述べられている。「《碁》、日本人の国民的ゲーム。数学教員リヒャルト・シューリヒによる解説及び理解しやすい叙述。チェスよりも 3000 年古く、組み合わせの多様さの点でチェスに劣らないゲームをドイツの民衆に身近なものとするには、私たちの時代になるまで保留されていた。数百年前から中国と日本において、熱心な研究及び学術的取り扱いの対象とされてきた […]  
ゲームである。このゲームに添えられた小冊子において、[…]  
非常に興味深く魅力ある囲碁の規則と習慣について私たちに知識を与え習熟させることを、数学教員リヒャルト・シューリヒ氏は試みた。そして白石 181 子、黒石 181 子ならびに碁盤の一式を、エレガントな箱に入れて私たちに提供している。[…]  
刺激的な娯楽を好む者たち、そしてチェスを知っている全ての人々に囲碁はとりわけおすすめである。それどころかこのゲームがまもなくチェスに並ぶ、それにふさわしい地位を占めるだろうことを私たちは疑わない。」 Vgl. Die Presse (17.6.1882), S.11.

<sup>22</sup> Pratesi, Eurogo1. S.74.

<sup>23</sup> Leopold Pfaundler: Das chinesisches-japanische Go-spiel. Leipzig (B. G. Teubner) 1908.

である。日本の囲碁文献を翻訳して掲載することも目標である。<sup>24</sup>

このような目標のもと、プファウントラーは1909年2月から1910年2月までに『ドイツ碁新聞』を第10号まで発行する<sup>25</sup>。この新聞は手書き原稿の複写という形態をとり、各号が4頁からなっていた。第1号から通しで頁数が記入されたため、最終頁数は40である。また、この新聞には囲碁プレーヤーたちのリストが掲載されており、そこからベルリン、ヴィーン、グラーツにおいて囲碁が盛んだったことがわかる<sup>26</sup>。本稿ではこれらの都市のうち、ベルリンで活躍した囲碁プレーヤーたちに焦点を当てる<sup>27</sup>。

ベルリンにおける囲碁のパイオニアは、数学者でチェスプレーヤーのマックス・ランゲ (Max Lange 1883-1923) である。この当時から戦後に至るまで長期にわたりドイツ囲碁界で活躍するフェリックス・デューバル (Felix Dueball 1880-1970) は、ランゲが『東アジアのボードゲーム』(Ostasiatische Brettspiele)<sup>28</sup>に見出した囲碁を1907年頃に知り、『マイアーの大百科事典』(Meyers grosses Konversations-Lexikon)を頼りに彼らは囲碁に取り組み始めた。そして他のチェスプレーヤーたちもそこに加わっていった<sup>29</sup>。ランゲは後に数年間日本で暮らし、囲碁に秀でた者たちと対局を行っているが、日本滞在中に日本のランクシステム及び彼らとの対局において自らが必要とするハンディキャップについて、ドレスデンのブルーノ・リュウガー (Bruno Ruger 1886-1972) に情報を送る。この情報からリュウガーが後に独自のランクシステムを生み出すのである。

当時のベルリンの囲碁グループにはおそらくドイツ囲碁史で最も重要な人物が属していた。それがフェリックス・デューバルである。デューバルの囲碁人生については、1947年

---

<sup>24</sup> 残念ながらプファウントラーによる『ドイツ碁新聞』を入手することはできなかったが、オーストリアの囲碁史に詳しいベルンハルト・シャイト (Bernhard Scheid) のホームページには、この新聞の第1号第1頁の写真が掲載されている。Vgl. <http://pokspace.goverband.at/essays/anfaenge.htm> また、シャイトはその他の頁からも引用をしており、本稿はこれらの引用も参照した。

<sup>25</sup> 『ドイツ碁新聞』が短期間で廃刊となった原因は、予約購読者数が増加しなかったことにあった。プファウントラーは『ドイツ碁新聞』第10号で次のように述べている。「この第10号によって最初の1年分、及びその予約購読が終了する。私たちが次第により多くの予約購読者たちを見出すだろうという期待は満たされず、その数は44にとどまった。だからと言って私たちはまだこの件を完全にあきらめるつもりはないが、送付の費用と労力を省くために、この小新聞を増大させ、3か月に一度だけ [...] 発行するつもりである。購読する気がある者たちに申し込みを願う。」しかし3か月後、この予告通りの発行は行われず、『ドイツ碁新聞』の発行再開は約10年後によりやく新たな編集者によって行われることになる。Vgl. Siegmar Steffens: Zur Geschichte der Deutschen Go-Zeitung (1). In: Deutsche Go-Zeitung (1/2005), S.22-23, hier S.23.

<sup>26</sup> Pratesi, Eurogo1. S.78f.

<sup>27</sup> 西洋において囲碁は当初ドイツ及びオーストリアで広まり、後者において『ドイツ碁新聞』が発行されるというように、両国のプレーヤーたちにつながりがあったことは明らかであるが、本稿ではオーストリアの囲碁史については必要な場合のみの言及に止めることとする。

<sup>28</sup> Dr. Junghans: Ostasiatische Brettspiele. In: Velhagen & Klasings Monatshefte (Februar 1905), S.677-687.

<sup>29</sup> Pratesi, Eurogo1. S.86ff.

に彼から直接囲碁を学んだギュンター・シーソウ (Günter Cießow) が 2009 年の『ドイツ碁新聞』において記事を掲載している。シーソウによると、デューバルは学友で後に義兄弟となるランゲとともに囲碁に取り組み始め、次第に小さな囲碁のグループが形成されていた。毎週火曜にはカフェ・モカ・エフティ (Moka Efti)、後にはカフェ・ヴィクトリア (Viktoria) に囲碁仲間が集まるようになった。そして次第に日本人プレーヤーたちとのコンタクトが増加する中、デューバルはドイツ最強のプレーヤーとして日本の新聞で報じられ、彼は日本で「ドイツ本因坊」と呼ばれるようになる。これによりいよいよ多くの日本人囲碁プレーヤーが、ドイツを訪れる際に彼とコンタクトを取るようになった。1930 年には大倉喜七郎 (1882-1963) 男爵によって、デューバルとその妻は 1 年間日本に招待され、滞在中に彼は日本のプロ棋士たちと対局した。とりわけ本因坊秀哉 (1874-1940) との対局において、彼は置石を 8 子与えられ勝利を収めた。滞在終盤の 1931 年 5 月には、彼は日本棋院から初段の段位を与えられた。その後、1936 年には日本の『東京日日新聞』とドイツの『フェルキッシャー・ベオーバハター』(Völkischer Beobachter) の主催で、鳩山一郎 (1883-1959) 対デューバルの電報を用いた遠隔対局が 2 か月間にわたって行われ、鳩山が勝利を収める。この対局は日本でも関心呼び起し、『東京日日新聞』の公開掲示板において対局の進行が示された<sup>30</sup>。

エドゥアルト・ラスカー (Eduard Lasker 1885-1981)<sup>31</sup>もまた、当時のベルリンの囲碁グループに属するチェスプレーヤーであった。エドゥアルトによると 1905 年、工学学生だった彼は友人のランゲと共にコルシェルトの記事から囲碁の規則を学ぶ。その後、彼らはチェスプレーヤーたちが集まるカフェ・バウアー (Bauer) で、囲碁欄付きの日本語新聞を読んでいる日本人を見つける。彼らはその日本人が去ると囲碁欄を理解しようと試み、棋譜を読むことはできた。しかし記載されていたのは約 150 手までであり、盤面から彼らは、黒が優勢であるもののまだ続きの棋譜が翌日の同紙に掲載されているだろうと考えた。しかし数日後、再びカフェを訪れた日本人から、棋譜の終わりに書かれているのは黒が対局を放棄したということ、つまり白の中押し勝ちだと教えられる。黒が優勢であると見ていた彼らは非常に驚くが、それから数週間後、ランゲは注意深い検討の結果、20 手以上後に白が約 30 子の黒を取る手に気付いたことをエドゥアルトに告げる。これを機に彼らは囲碁を教え

---

<sup>30</sup> その後もデューバルの活躍は続いた。ベルリン封鎖時の停電の際にもデューバルは囲碁プレーヤーたちを自宅に招き、蓄電池で電球を灯して対局を行った。1950 年代末にはデューバルの自宅では空間が不足し、シャルロッテンブルクのカント通りにあるカフェ・ヤンツ (Janz) が西ベルリンの囲碁プレーヤーたちの主な集合地となり、デューバルは常にこのカフェにいた。彼は 1951 年 3 月 15 日に二段、1954 年 5 月 5 日に三段、1958 年 10 月 10 日には四段の段位を日本棋院から与えられた。さらに 1960 年 3 月 20 日には名誉五段、没日の 1970 年 10 月 8 日には六段の段位が与えられた。また、1964 年には囲碁普及の功労者に贈られる大倉喜七郎賞、1970 年 10 月 8 日には天皇から勲五等瑞宝章を授与された。Vgl. Günter Cießow: Felix Dueball, der „Doitsu Honinbo“ (1). In: Deutsche Go-Zeitung (1/2009), S.42-44; Günter Cießow: Felix Dueball, der „Doitsu Honinbo“ (2). In: Deutsche Go-Zeitung (2/2009), S.37-43.

<sup>31</sup> エドゥアルトはエドワード・ラスカー (Edward Lasker) としても知られている。

てくれる人物を探し、日本人特別研究員のキタバタケヤスゴロウ<sup>32</sup>を見出す。彼らは最初キタバタケを相手に4子置いて対局していたが、約1年後には彼と互先で対局できるようになった。彼らが囲碁の勉強を始めてから約1年半後には、アメリカからドイツに帰国したチェスの世界チャンピオン、エマーヌエル・ラスカー（Emanuel Lasker 1868-1941）も囲碁仲間に加わり、エマーヌエルの自宅で囲碁の夕べが開かれるようになった。彼は1年後にはキタバタケに2子置かせて対局することができるようになった<sup>33</sup>。

その後、キタバタケの仲介によってベルリンの囲碁プレーヤーたちに驚きの体験がもたらされる。囲碁初段の棋力を持つ日本人数学教授<sup>34</sup>がベルリン経由でロンドンに向かうことになり、ベルリンのプレーヤーたちに彼と対局するチャンスが訪れたのである。とりわけエマーヌエルが自信を持って臨んだこの対局の結果は惨憺たるものだった。ベルリンのプレーヤーたちは9子置かせてもらいながら、この数学教授に手も足も出なかったのである<sup>35</sup>。

このようにしてドイツではベルリンで、とりわけチェスプレーヤーたちの一部を中心に囲碁グループが形成された。日本人数学教授に大きなハンディキャップを背負わせた上で対局したにもかかわらず全く歯が立たなかったことから、彼らの棋力がまだ低かったことは明らかである。しかし、この対局の後、日本に行つて強くなろうと考えたエドゥアルト及びエマーヌエル、実際に日本を訪れるランゲ<sup>36</sup>、そして日本との懸け橋となるデューバルの活動には、ベルリンにおいて囲碁に本気で取り組む者たちが現れたことが示されている。ベルリンはその後、第二次世界大戦後に至るまでヨーロッパの囲碁中心都市であり続けることになる。

### 3. ブルーノ・リュウガーの『ドイツ碁新聞』

ベルリンの囲碁グループにわずかに遅れてドイツの囲碁界に登場するドレスデンのチェ

---

<sup>32</sup> この人物に関する詳細は不明である。

<sup>33</sup> Edward Lasker, From My „Go“ Career (1). In: Go Review (7/1961), S.51-52.

<sup>34</sup> この数学教授に関する詳細は不明である。ただし『ドイツ碁新聞』には、プファウントラーがランゲから聞いた話として次のように述べられている。「最近、ニゲシ(?)という名の高ランクの達人がベルリンの日本クラブで9子のハンディキャップにもかかわらず、常に対局者全員を打ち負かした。彼は終局後に全ての対局を思い出して再現することもできた。」Vgl. [http://pokspace.goverband.at/essays/fund\\_pfaundler.htm](http://pokspace.goverband.at/essays/fund_pfaundler.htm)

<sup>35</sup> Edward Lasker, From My „Go“ Career (2). In: Go Review (9/1961), S.62-64. hier S.62. エドゥアルトは1911年に大学を卒業し、ベルリンのアルゲマイネ・エレクトリツィテーツ・ゲゼルシャフト (Allgemeine Elektrizitäts-Gesellschaft) に就職。彼はこの会社の東京支部への移転を希望するが、まずは英語を学ぶために1912年にロンドンに送られた。しかし1914年、第一次世界大戦が始まりエドゥアルトの日本行き計画は無に帰す。彼は強制収容所に送られるが、外国人の問題に関して全権を握るホールデン・ポーター (Haldane Porter 1867-1944) の秘書がチェスファンであり、ロンドンのチェス選手権で活躍していたエドゥアルトは、この秘書の仲裁によりアメリカに渡ることができた。1934年、彼はカール・デイヴィス・ロビンソン (Karl Davis Robinson 1884-1961) 及びリー・フォスター・ハートマン (Lee Foster Hartman 1879-1941) と共にアメリカ碁連盟 (American Go Association) を創設する。

<sup>36</sup> ランゲは1923年、関東大震災で死亡。Vgl. Pratesi, Eurogol. S.87.

スプレーヤーによって、ドイツの囲碁史はさらに一手先に進むことになる。ドレスデンの哲学教員ブルーノ・リュウガーは 1908 年のプファウントラーの著作から囲碁を学び、既に 1916 年には囲碁に関する小冊子を出版することになるのだが<sup>37</sup>、他ならぬプファウントラーの著作から囲碁を学んだことが、かつて存在した機関紙『ドイツ碁新聞』とリュウガーの接点を生み出すきっかけとなった。当時のことをリュウガーは次のように述べている。

仕事あまり忙しくなかった時、私はプファウントラーの教本を徹底的に研究するための時間を取った。そしてそこに、表現の間違いあるいは誤植と思われる数箇所を見つけた。私が著者に手紙を書くと、彼は私が正しいと認め、その際、彼は 1909 年に囲碁新聞を発行したものの読者数がわずかであったため 1 年後に廃刊となったことにも言及した。彼はまだ数部の残りを持っていた。私は 1 部を切に求め、折り返しの返事でそれを受け取った。[…] どれほど徹底的に私がこの定期刊行物を研究したことか。<sup>38</sup>

このようにして『ドイツ碁新聞』の存在を知ったリュウガーによって、1920 年にこの機関紙の発行は再開される。ただし発行再開時、彼はその任務を長期にわたって引き受けるつもりではなかったようである。このことはプファウントラーによる 1 年間の発行に続き、2 年目となる『ドイツ碁新聞』の第 1 号において次のように述べられている。

囲碁という素晴らしいゲームは年々より多くの支持者を見出している。1919 年に宮廷顧問官レオポルト・フォン・プファウントラーによって発行されながら、1 年間の存続の後に廃刊となった『ドイツ碁新聞』を新たに生き返らせるという願いが、様々な方面から述べられた。それに適した者が見つかるまでこの新聞の編集員を引き受ける気があることを、私は喜んで宣言した。[…] ドイツ及びドイツと親しい隣国において囲碁が広まるとするなら、それは広く分散して暮らす囲碁プレーヤーたちがある機関紙に

---

<sup>37</sup> この小冊子にはかなりの需要があったようで、リュウガーは次のように述べている。「私は 13 路盤にのみ適した小さな手引きを書き、それをライプツィヒのミニアトゥール・ビブリオテーク出版に送った。[…] それは 10000 部印刷され、ドイツに囲碁の名を知らしめるために本質的に貢献した。」Vgl. Erwin Gerstorfer (Zusammenfassung): Wir beide: Go und ich. In: Deutsche Go-Zeitung (1,2/2000), S.40-43, hier S.40. この記事は 1965 年から 1972 年に公表されたリュウガーによる 5 つの記事をエルヴィン・ゲルシュトルファーがまとめたものである。これらの記事についてプラテージは「それらはいくつかの囲碁定期刊行物の中に散在しており、現在、見出すのが困難なものもある」と指摘している。Vgl. Pratesi, Eurogo2. S.6. 今回私が入手したのは 5 つの記事のうち、次の 1 つである。Bruno Rüger: Wir beiden: Go und ich. In: Deutsche Go-Zeitung (6/1972), S.1.8-1-1.8-9. ゲルシュトルファーによる記事とほぼ同じタイトルのこの記事においては、1927 年から戦後にかけてドイツ囲碁界に起こった出来事が述べられており、もちろんゲルシュトルファーによる記事よりも詳しい叙述となっている。しかし後述のナチスの活動に関しては、この記事においては一切言及されていない。

<sup>38</sup> Gerstorfer, S.41.



よって結びつき、共同体を形成することでのみ可能なのだと私は思う。<sup>39</sup>

この引用に示されている通り、リューガーによる『ドイツ碁新聞』の発行は他に「適した者が見つかるまで」という条件の下において開始された。ところが適した者は結局見つからなかったようで、彼はこの任務を長期に渡り遂行することとなる。

リューガーの編集者としての活動も常に順調に進んだわけではなく、困難な時期の1つとしてインフレ時の状況を、彼は次のように述べている。

物価高はこの囲碁新聞に破壊的な作用をもたらした。1921年分はまだ12マルクだったが、1922年には25マルクが支払われなくてはならなかった。1923年の第1号は300マルク、第2号は1000マルク、そして第3号は37000マルクであった。この年にはそれから、さらに二度の追加払いを要求しなくてはならず、それらは数十万マルクに達した！ [...] 他のこのような定期行物のほぼ全てが廃刊となったこの困難な時期に私たちの囲碁新聞を守り通したことを、私は今日なお嬉しく思い、それどころか少し誇らしく思う。<sup>40</sup>

リューガーによる『ドイツ碁新聞』の発行は、このような困難な時期を乗り越えながら第二次世界大戦終了時まで継続された。

リューガーの『ドイツ碁新聞』編集及び発行を支えた人物としては、特に2人の人物を挙げることができる。1人は囲碁促進のためにリューガーの後援者となったヴァーグナー（Wagner）なる人物<sup>41</sup>、もう1人は1925年から没年の1942年まで日本の囲碁文献を翻訳し、リューガーに提供し続けたヴィーンの言語学教授エドゥアルト・ノネンマッヒャー（Eduard Nonnenmacher 1871-1942）である。とりわけノネンマッヒャーが果たした役割の大きさについて、リューガーは次のように述べている。

1925年7月号において [...] 私は4子の置き碁対局の序盤を日本の教本から取り上げ公表した。その解説はヴィーンのノネンマッヒャー教授によってドイツ語に翻訳されていた！ [...] 私の出版物の多くは彼の翻訳に基いている。もしこの親切な学者が自らの余暇の数千時間を囲碁に捧げていなかったら、私たちの囲碁の知識は今日なおどれほどのものだったことだろう！そして彼はそのために1ペニヒも受け取らなかった！今日の囲碁青少年は英語に翻訳された日本の囲碁テキストによって勉強を続けることができる。しかし、私たちのようなより古い世代の者たちは、ノネンマッヒャーの翻訳

---

<sup>39</sup> Siegmur Steffens: Zur Geschichte der Deutschen Go-Zeitung (2). In: Deutsche Go-Zeitung (2/2005), S.20-21, hier S.20.

<sup>40</sup> Gerstorfer, S.42.

<sup>41</sup> ヴァーグナーは1922年1月22日に死亡。Vgl. Ebd., S.41.



によって初めて囲碁の真なる精神を理解したのであり、彼がいなければ皆が数階級劣っていたことだろう！<sup>42</sup>

リューガーが『ドイツ碁新聞』の発行を再開した当時、そして戦後に至るまで、ドイツの囲碁プレーヤーとしてはもちろんデューバルの存在が際立っていた。しかし、この機関紙の発行という任務を自ら負うことによってリューガーは、ナチス時代までのドイツ囲碁界の組織者というべき存在となっていく。とりわけ『ドイツ碁新聞』が囲碁プレーヤーたちを結集させるための手段ともなったことで、リューガーの役割の重要性は増したといえる。1926年、リューガーはこの機関紙上で読者に1927年の夏の休暇をどこで過ごすかを尋ねた上で、イルメナウで落ち合うことを提案する。イルメナウでの集まりには6人が参加し、合計で約80の対局が行われた。このような夏の囲碁会議が1927年から1933年まで開催地を変更しながら毎年行われ、その告示はこの機関紙に掲載された<sup>43</sup>。出席者数からも明らかな通り、当初この会議は非常に控えめなものであったが、リューガーが主張するように、まさにこの会議は後の「ヨーロッパ碁会議」(Europäischer Go Kongress)の起源となるのである<sup>44</sup>。

リューガーが果たしたさらなる大きな役割としては、独自のランクシステムの導入が挙げられる。彼のシステムは日本のそれを基に、より低いレベルにまで次のようにランク付けを拡大したものである。

日本の9段及び9級の階級は私たちには不十分だったので、全ての囲碁プレーヤーたちを50の階級に区分することを、私はこの囲碁新聞で提案した。1から9の階級：達人たち、10から25の階級：強いプレーヤーたち、26から41の階級：中級のプレーヤーたち、42から50の階級：弱いプレーヤーたち。<sup>45</sup>

対局の際、中級プレーヤーまでは1ランク間のハンディキャップは0.5子だが、ランク42以下では1子のハンディキャップが与えられた。このシステムによって正確なランク付けを行うために、リューガーは『ドイツ碁新聞』の定期購読者たちに、どのような対局であれ結果を報告するよう求めた。各プレーヤーの新たなランクはおおよそ2年に一度『ドイツ碁

---

<sup>42</sup> Ebd., S.42.

<sup>43</sup> Pratesi, Eurogo2. S.19f. 1928年、そして1934年には告示が『ドイツ碁新聞』に掲載されたものの、実際に会議が開催されたのかは不明。

<sup>44</sup> リューガーは次のように述べている。「1927年初頭 [...] 私はチューリンゲンのイルメナウで夏の休暇を過ごすつもりであることを、この囲碁新聞において公表した。[...] 囲碁会議が誕生した年である！一目で手軽に参加者たちを展望することができた。[...] デューバル、フレージュル、グレートライン、ラスカー博士、ローゼンヴァルト博士、そしてブルーノ・リューガー。」 Vgl. Gerstorfer, S.42.

<sup>45</sup> Ebd. 1922年にはデューバルがランク23、リューガーがランク26に位置付けられている。 Vgl. Franco Pratesi: The Go ranking system of Bruno Rüger. In: British Go Journal (Autumn 2000), S.44-45, hier S.45.

新聞』に掲載された<sup>46</sup>。

このようにドイツの囲碁のために様々な点で尽力したリューガーであるが、自らが中心となって活動していた時期、その尽力の反映として捉えることもできる『ドイツ碁新聞』の予約購読者数の変化に不満を感じていたようである。プラテージの著作に示されている通り、この頃わずかながら『ドイツ碁新聞』の予約購読者数は増加している<sup>47</sup>。ただしリューガーはこの時期について、1943年の『ドイツ碁新聞』で次のように述べている。

1920年初頭、2年目の第1号が発行された。しかし読者リストには最初、45の名前が示されるのみであった。[...] 1934年、読者数はわずか63にすぎなかった。その数が[...] それ以前に80を超えることは決してなかった。<sup>48</sup>

『ドイツ碁新聞』の予約購読者数の観点からすると、リューガーにとってドイツ囲碁界は期待通りには発展していなかった。そして間もなく訪れる予約購読者数の急激な増加の際、ドイツ囲碁界の中心的組織者の地位にはリューガー以外の人物が立っていたのである。

おわりに

本稿冒頭で述べた通り、ドイツ碁連盟ホームページのフォーラム上でのドイツ人囲碁愛好家たちの意見を念頭に置きながらドイツの囲碁史をその黎明期から振り返ることによって、かつてドイツで囲碁発展の展望が開けていた時期があったのかを検証することが、本研究の1つの目的であった。本稿ではリューガーの時代まで、つまりナチス時代に至る直前までの囲碁史を概観したが、そもそも囲碁文化が全くないところから開始されたパイオニアたちの活動は全て、ドイツの囲碁の進展につながるものとして捉えることができる。囲碁に関する書籍や道具がドイツでも取り扱われるようになり、それらに対してかなりの需要があったこと、そして囲碁プレーヤーたちを互いに結び付けるべく『ドイツ碁新聞』が発行されるようになったこと等を本稿で確認した。しかしながらリューガーの時代、囲碁普及の度合いを測るための1つの指標ともいえるこの機関紙の予約購読者数があまり増加しなかったことも本稿で確認した通りである。

数値として明白にこの点での発展が確認される時期は1937年からのことである。上述の記事においてさらにリューガーは次のように述べている。

1937年、ドイツ碁連盟の創設が報告される。囲碁新聞は91人の読者というそれまでで最高の水準に到達する。私たちのゲームをいよいよ広く普及させるために公式の囲碁コースが行われるということが、様々な地域から報告される。[...] 1943年、読者数

---

<sup>46</sup> Pratesi, Eurogo2. S.15.

<sup>47</sup> Ebd., S.47.

<sup>48</sup> Steffens: Zur Geschichte der Deutschen Go-Zeitung (2), S.20f.

は 150 となり、それまでで最高の水準に到達する。<sup>49</sup>

ここで述べられている通り、ナチス時代、1937 年にはドイツ碁連盟が創られ<sup>50</sup>、囲碁は帝国青少年指導部の教育、報道、宣伝部局担当者ヴァルター・ブラヒェッタ (Walther Blachetta 1891-1959) の指導の下、国家的なプロジェクトとして促進されるのである。そしてその際には当然のごとく、囲碁の起源がゲルマン民族にあるとする次のような主張の下で、ナチスの囲碁プロジェクトは展開されることとなる。

今日の囲碁プレーヤーたちが問題なく囲碁の対局に用いることができるであろうゲーム用の板と石が古代ローマのゲルマニアの辺境防壁に残されている。例えば本や論文において最も多く引用されるマインツのゲーム用の板は屋根瓦であり、その上に槍の先端あるいはそれに似たものによって領域を区分する 10×10 の交差する線が引かれたようである。(フラットラウンド形と半球形の) 黒と白のゲーム用の石はゲルマン人の戦没者埋葬地で非常によく発見された石によく似ている。このこと及びゲルマン人たちが非常に熱心にボードゲームに取り組んだことがよく知られているという事実は、古代ローマの兵団のゲルマン人兵士たちによってこのゲームが作られたと推測するきっかけを先史時代研究に与えた。<sup>51</sup>

国家的促進が行われたこの時代、囲碁はドイツにおいて最大のチャンスを迎えていたと言える。プラテージによると、ブラヒェッタのプロジェクトには計画にとどまったものも少なくないようであるが<sup>52</sup>、先述の通り、ナチス時代に『ドイツ碁新聞』の予約購読者数が増加したことは事実である。次稿ではブラヒェッタの活動を捉えるところからドイツ囲碁史の概観を再開し、本研究の観点からの分析を行いたい。

---

<sup>49</sup> Ebd., S.21. 『ドイツ碁新聞』の予約購読者数に関するリュウガーの主張は、戦後になると次のように変化する。「1920 年にはさらに、他の重要な囲碁に関する出来事が起こった。私は [...] 囲碁新聞を復活させた。ヴァーグナーと私はそれに向けて公告ピラを送り、当初 45 人の読者しかいなかったにも関わらず、思い切って発行を行った。この年の末にはその数は 70 に上昇し、1922 年には 94、1923 年には 113 だった。1945 年まで、これよりはるかに多くなることはなかった。」Vgl. Gerstorfer, S.41. 『ドイツ碁新聞』にはしばしば予約購読者たちのリストが掲載され、プラテージがそれらのリスト上の名前を全て列挙していることから、各年の予約購読者数を確認することができる。そこからわかるのは、リュウガーによって戦後に述べられた数値は各年の『ドイツ碁新聞』の予約購読者数ではなく、一度予約購読を開始した後にそれを止めた者たちも含めた場合の数であること、そして 1943 年の『ドイツ碁新聞』における数値が各年の実際の予約購読者数に合致していることである。戦後、ナチスの活動の成果を否定するという意図の下、1920 年代の予約購読者数を大きく見せるべく予約購読を止めた者も含む数値が挙げられた可能性を否定できないだろう。Vgl. Pratesi, Eurogo2. S.135ff.

<sup>50</sup> 次稿において詳述する予定であるが、この組織は現在のドイツ碁連盟とは別組織である。

<sup>51</sup> Walther Blachetta: Das Go-Spiel. Berlin (R. Sala) 1938, S.2.

<sup>52</sup> Pratesi, Eurogo2. S.61.